

HOPE

Bourgogne

ブルゴーニュ小史(3)

文芸評論家

饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。著書に、『石と光の思想』（勁草書房）、『小林秀雄とその時代』（文芸春秋）、『恩寵の音楽』（音楽の友社）、『西欧と愛』（小沢書店）、『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』（新潮社）『ヨーロッパの四季』（東京書籍）など多数。

(一)

ところで725年から732年にかけて、とくにロワール、ポワトゥーにイスラム勢力が侵攻してきた。6世紀からはじまった彼らの中近東、西ヨーロッパへの攻撃は711年にはアフリカからジブラルタルとアルジェシラスに向い、720年にはガリアに向けられたのである。その結果がブルゴーニュ地方を含めた中部フランスへの北上であった。しかしこの732年にカール・マルテル指揮のフランク軍が彼らをツールとポワティエの間で破ったことによって西ヨーロッパは辛うじて愁眉を開いたのである。とはいえ8世紀のこの時代、地中海もほぼ完全に「イスラムの海」となった。

ローマ教皇はシャルル・マルテルに聖ペテロの墓の鍵を送り、ローマ教会の保護者であることを希求したのである。シャルル・マルテルはムーズ地方のペパン家の出で、前回でふれた宮宰であったが、やがて、マルテルの息子、パペン・ル・ブレフは教皇ボニファキウスに戴冠式を与えられ、以後この家系からのみ君主をえらぶことが命じられたのである。その息子がシャルルマーニュ大帝となり、「神の恩寵による王」と自他ともに認めるようになり、教会の守り手として生涯を送り、フランク王国を統一した。いわゆるカロリング王朝の栄光を示すことになる。

さて、キリスト教会の展開に戻りたい。ローマ時代から古代都市には司教がいたが、次第に農村に小

さな教会がつくられるようになる。つまり貴族が村につくった個人的礼拝堂が聖別され、ミサをあげ、秘蹟をさずける司祭が農村の中心となり、彼らと生活をともにするようになったのである。むろん農家は十分の一税をおさめ、供物を出していたから、司祭の教会と彼らは一心同体となり、かつて都市的であったキリスト教は農村的となって浸透して行った。だが、その分だけ、地方の古くからの異教的習慣が逆に司祭に影響を及ぼし、10世紀の公会議が妖術と占いを農村の司祭に禁止するようになったのもその一つの例である。

(二)

このような農村のキリスト教化と、他方、クリュニー修道会、及び後のシトー修道会がブルゴーニュ地方に生れ、この地方が中世におけるキリスト教会の中心となる迄には尚いくつかの過程があった。761年の、オータンからシャロンにかけてのアキテーヌ軍の侵攻がブルゴーニュの抵抗を圧倒するという出来事もあり、またノルマンの広汎なヨーロッパへの出現が8世紀の末からはじまった。彼らは長身金髪で、底の浅い舟を巧みに操って河川をさかのぼり、村や町、修道院を襲った。これにかなうものはなく、人々はひたすら内陸へと逃げる。たとえばロワール河口にあるノワルムティエ島の聖フィリベール修道

院の人々が聖遺骨を奉じて各地を逃げ、ついにブルゴーニュのトゥルニュに安らぎを得たことは、その一例であろう。875年のことである。

こうしたノルマンに対する防衛から堅牢な城が各地に生れ、そこから「耕す人」「戦う人」「祈る人」という三身分をもつ封建制度が出現してきた。それゆえ、この城を中心として村がつくられ、地方権力が形づくられ、いわゆる「中世」が成立してくるのである。イスラム、ノルマンに加えてハンガリーの平原からヨーロッパを席卷したマジャール(牧畜民族)も逸することはできまい。先に挙げたブルゴーニュのトゥルニュにある聖フィリベール教会もその例外ではなかった。彼らはその残忍さで「アンティクリストの使者」とさえ言われたのである。彼らが荒しまわったのは主として東フランクであったが、それはフランスのロワール河周辺、ブルゴーニュ地方にまで及んだ。しかし最後にマジャールは933年と955年、ザクセン侯出身の国王ハインリッヒとその子オットーに破れてその攻撃は終息したのである。

とはいえこの間もブルゴーニュ地方の諸教会はオーセロワのサン・ジェルマン(9世紀半ば)やサン・レジェ・ド・シャンポー、ヴェズレーの下にあるサン・ペール等が興隆し、やがて910年、アキテーヌのギヨーム大公によってクリュニー修道院が創立され、それまで世俗の権力に左右されがちであった修道院がローマ教皇直属の自立した形をとるに至ったのである。この指導的役割を演じたのが、オド、マイヨール、オディロ、大ユーク、それに尊者ペトルスであり、その多くは貴族出身であった。クリュニーでは貨幣鑄造権があり、司教への服従はない。やがてこのソーヌ河支流につくられた小さな修道院が2世紀後にはキリスト教世界の大修道院帝国の中心となり、その数3000に及ぶ小修道院が傘下におかれ、フランスを中心としながら、ヨーロッパに遍在する「靈

的発電所」となる。

もとよりこのピラミッド構造の精神とは、ベネディクトゥス(モンテ・カシーノ)の修道院規律への統一的回帰であった。それと同時に中世の学芸文化の中心となる。12世紀の硯学、アベラールもここに生きた時期をもったものである。



Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか? 数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

お問い合わせは(株)佐多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ

TEL:03-5762-3010 担当:岩沢、田中

